

第一部

マンドリンオーケストラのためのディヴェルティメント

[二橋潤一：1950 年生まれ]

二橋氏は東京藝術大学作曲科卒業後渡仏。パリ国立音楽院入学。和声法科、対位法科を、プルミエ・プリを取得して修了。作曲、音楽理論を故オリヴィエ・メシアン、故アンリ・シャラン、ベルナルド・ド・クレッチ、故池内友次郎、宍戸睦郎、故矢代秋雄の諸氏に学ぶ。マルセル・ジョセ国際作曲コンクール第1位受賞、ル・アーブル国際作曲コンクール第2位受賞、武井賞受賞。作品にオペラ「三郎信康」、「ギター協奏曲」、吹奏楽のための「寿歌」、ギター四重奏のための「残像」等がある。桐朋学園大学、洗足学園大学非常勤講師、及び、北海道教育大学教授を歴任。

本曲は1992年に作曲され広島プロムジカマンドリンアンサンブルにより初演された。

ノスタルジー

[シルベストリ：1871年～1960年]

シルベストリはイタリアのモデナに生まれた。14歳からギターを習うとともにマンドリンに愛着を持つ。その後、和声対位法など音楽全般を学んだあとモデナの吹奏楽団の指揮者に任命され、さらに、モデナ・マンドリン合奏団を創設した。

本曲は、スローなテンポの中で、内に秘めた望郷の想いがひそかに燃え上がるような、何とも言えない深みを感じさせる。マンドラが奏でる始まりから心地よいハーモニーが続き、さらに、マンドリンの高音が、遠くから聴こえてくる鈴の音のように聴こえ、繊細で穏やかな美しさを醸し出している。

舞踊風組曲第2番作品21

[久保田孝：1942年生まれ]

本曲は、1983年12月6日、銀座中央会館での上智大学ソフィアマンドリーノ第22回定期演奏会において、作曲者である久保田孝氏の指揮で初演された。マンドリン諸団体で毎年数多く演奏される氏の代表作である。

本曲は、大きく分けて3つの部分からなっていると考えられる。

最初の部分は、序奏の力強い変拍子の動機と、もの悲しげなイ短調の旋律による複雑な融合からなり、序奏が再現された後に、5/8、3/8 というように拍子を縮めて緊張感と勢いを高め、落ち着いた後にマンドリンからマンドロンチェロまでの uno Solo で終わる。

第二の部分ではマンドリンとギターの4分音符による和音によって、マンドラとマンドロンチェロによって憂いをもった旋律が奏される。そしてそれは次にマンドリンへと受け継がれ、マンドロンチェロの対旋律を伴って繰り返される。

第三の部分は、ギターとコントラバスによる原始的で不気味な感じのする8分音符のリズム上で、まずはマンドラ、マンドロンチェロが旋律を奏し、その後それらにマンドリンが加わってヴォルテージを高める。これが最高潮に達したところで最初のイ短調の旋律が8分音符のリズムに乗って劇的に現れる。再び原始的な舞曲が展開され、徐々に静まっていった後憂愁を帯びたマンドリンのソロが始まる。その後高音部と低音部で16分音符主体のフレーズをかけ合い、再度、序奏部が現れ、前述した原始的な舞曲が転調を繰り返しながら展開し、最初の旋律が再現してクライマックスを迎える。そして最後に $p < f$ 、 $ppp < ff$ という音量的な効果を経過した後に、力強い ff の3連打で終わる。

(上智大学ソフィアマンドリーノ第40回定期演奏会パンフレットより転載)

第二部

交響的前奏曲

[トレヴィジオル：生没年不詳]

作者の経歴については、ほとんど知ることができないが、1940年度のイタリア作曲家年鑑には、第二次世界大戦前まではイタリア領であったフィウメ（現在のスロヴェニアのリエカ）在住の吹奏楽指揮者と記載されている。オペレッタ「仮面の下」他、多くの管弦楽曲を発表、「愛の夢」「グロテスクなセレナータ」「滑稽なカンタータ」等の作品がある。また、1959～60年に自作を含むオルガン曲集を編集出版しているためオルガニストでもあった様である。

本曲は1929年に発表された管弦楽曲。宗教的な荘厳さと情熱的なロマンティズムを合わせ持つ作品で、低音部の処理にオルガニストとしての片鱗が窺われるのは興味深い。

セレナーデ風ガヴォット(1903) Gavotte-Serenade

[アメデオ・アマデイ Amedeo Amadei : 1866.12.9 Loreto～1935.6.16 Torino]

作者は1866年12月アドリア海に面したイタリア・マルケ州のロレートに生まれ、1935年にトリノに逝いた作曲家、オルガニスト、指揮者。父ロベルトと祖父ピエトロは共にロレート音楽院の院長で、祖母はオペラ歌手という音楽一家に生まれ、アメデオも父ロベルトに学び、5歳で作曲を始め、7歳で最初の作品を出版している。ボローニアのアカデミア・フィラルモニカでピアノ、オルガン、合唱指揮を学んだ後、ピアニスト（F.ショパンを好んだという）、オルガニストや合唱指揮者として活躍した。妹のセシリアはピアニストで、義弟のQ.ラツァリーニも作曲家でカペラ・ムジカーレ・ローレターナのオルガニストである。1889年には歩兵第73連隊軍楽隊長に就任、以降各地の軍楽隊長を歴任した。退役後はトリノに移住し指揮者・指導者として楽壇に大きな貢献を成し、イタリア共和国功労勲章の他、聖マリッツォ及びサロの十字勲章を授けられるなど長年の功績を称えられた。

作品番号のないものを含めると作品の総数は500曲を超え、特に管弦楽の為の6つの組曲は代表作としてしばしば演奏されたが、マンドリン関連の作品も100曲を超え、愛着のある分野であった事が伺える。またE.ジュディチが監督を務めるベルガモのマンドリンクラブの名誉会長に就任し、作曲コンクールの審査員を各地で務めた他、斯界刊行誌“Vita Mandolinistica”、“Il Piano”に於いて主幹を務める等幅広く活躍した。P.マスカーニは親友であり、夏になるとしばしばロレートを訪れたという。後年トリノに移り住んでからも旺盛な作曲意欲を持ち多数の作品を世に出した。1910年、トリノで“Lo Spettacolo”紙が主催したオペレッタの作曲コンクールはG.ドロヴェッティの「王女の物語」を台本としたものであったが、S.ファルボ、E.レデギエリをおさえて優勝を勝ち得ている。

本曲は1903年1月にベルガモで書かれ、翌年A.Comellini社の“Il Concerto”誌で発表されたマンドリン3部、マンドラ、ギターからなる合奏作品で同社の第2回作曲コンクールで金賞を受賞している。1928年には管弦楽版が同社から発表されている。“Il Concerto”版では結尾部が突如fになる点に違和感を感じるが、管弦楽版ではppのまま終結している。遺族から送られた“Il Concerto”誌にもアマデイ本人がペンを入れているが、こちらはアーティキュレーションの印刷漏れの記入の他、結尾部が和声の修正と共にppに訂正されており、アマデイの最終的な意向はppのまま終結する事であったと考えられる。

ガヴォットはフランスの古典民族舞踊を起源とする中庸なテンポの楽曲で4分の4拍子ないしは2分の2拍子で記譜され、弱起を特徴としている。アマデイはこの楽曲形式を特に好んでおり、「ミヌエットとガヴォッタ」、「インテルメッツォ・ガヴォッタ」、「田園風ガヴォッタ」等多くの作品が残されている。

参考資料

- ・ Albert De Angelis : Dizionario dei Musicisti(1928)
- ・ Carlo Schmidl : Dizionario Universale Musicisti (1929)
- ・ Ammne Comunale di Loreto :

Guida All'Altorelievo Commemorativo del Compositore Lauretano Maestro Amedeo Amadei(1988)

資料提供 マンドリン音楽資料館

ロマン的幻想曲「誓い」(1910) Il Voto, Fantasia Romantica

[ウーゴ・ボッタッキアリ Ugo Bottacchiari : 1879.3.1Castelraimondo~1944.3.17 Como]

作者は1879年3月10日イタリア、マルケ州マチェラータのカステルライモンドに生まれ、1944年3月17日ロンバルディア州のコモで没した作曲家、指揮者。地元の名家に生まれ、幼少時から音楽的感覚に優れていた点を両親が見だし、18歳でベザロのロッシーニ音学院に入学し、P.マスカーニに音楽理論、和声とフーガを学んだ。マスカーニは彼を称し「天性の才能を備えた若者で多くの事をなし遂げるだろう」と予言的な言葉を遺している。1899年にはまだ学生であったが歌劇「影”L'Ombra”」を作曲し、マチェラータのラウロ・ロッシ劇場で上演、成功を収めオペラ作曲家としてのスタートを切った。卒業後はルッカの吹奏楽団の指揮者やパチーニ音学院で教鞭をとるなどしたが、移り住んだコモでは同地出身のA.カッペルレッティと親交を結び、マンドリン合奏団フローラの指揮を務めた(この楽団の指揮はその後のU.ゼッピに引き継がれた)。ちなみに郷土カステルライモンドの一面には、郷土の誇りとしてウーゴ・ボッタッキアリ通りが設けられている。

マンドリン楽曲としては斯界の金字塔である交響曲「ジェノヴァへ捧ぐ」、「交響的前奏曲」、詩的セレナータ「夢!うつつ!」など今も多くの奏者に愛される銘品の数々を残し、長く続いた斯界誌の”Il Concerto”の主幹も務めた。時すでに1910~20年代と言えばウィーンではA.ベルクやA.シェーンベルクがドデカフォニーを生み出し、ロシアではA.スクリャービンが神秘和音などを駆使して調性の概念をなくそうとしていた時代であったが、10代で直面した母の死によって「生と死」=「喜びと苦しみ」という作者の音楽の根幹を成す対立軸は情緒的に深く刻み込まれた。また師であるP.マスカーニと傾倒したR.ワーグナーの影響を受け、代表作と言われるものの多くは後期ロマン派風の分厚い和声と情緒連綿たる旋律に彩られている。本邦の斯界では標準的な編成と合致する事もあり、現在の日本にあっては特に貴重な作品群となっている。(実際にはもっと多彩な作品があるのだが)彼の友人であるアーノルド・コルドーニは彼の葬儀にあたり、次のようなメッセージを送っている。「ウーゴ・ボッタッキアリは繊細な感覚を理想的に再現し、天球の神聖な調和や、魂や心の親密な弦の振動からも、遠く離れた運動からでもインスピレーションを得る事が出来、音楽芸術に対して、生まれ持った独自の気質を持っていました。彼には生まれながらに芸術家の血が流れていたと言っても過言ではありません。(略)」

本曲は1910年10月の”Il Plettro”誌主催の第3回作曲コンクールに於いてS.ファルボの「田園写景」、L.メッラナ・フォークトの「過去への尊敬」と共に一等金牌を受賞した作品。マンドリン3部、マンドラ2部、マンドロンチェロ、マンドローネ、ギター2部、コントラバスと1910年当時としては大編成のものである。また本作の主題は作者のお気に入りであったようで、ミサ曲や歌劇「愛の悪戯」他の作品に引用的に用いられており、後年には本作とほぼ同一の構成を持つ管弦楽作品”l'Abbandonata”も作られている。

参考資料:

- ・ Giuseppe Gaggiotti : Ugo Bottacchiari nel Centenario della nascita 1879-1979 (1982)

資料提供 マンドリン音楽資料館

組曲「ナポリの風景」(1939) Quadretti Napolitani, Suite in 4 tempi

- I Festa a Santa Lucia (サンタルチアの祭)
- II Canzone a Posillipo (ポジリポ地方の唄)
- III Plenilunio sul golf (入り江を照らす月)
- IV Scugnizzi in Festa (祭日の悪戯っ子)

[イルミナート・クロッタ Illuminato Culotta : 1892.2.24 Collesano (Palermo)~1979.3.1 Genova]
(石村隆行編曲)

作者は1892年2月24日、シチリア島パレルモ県コッレザーノに生まれ、1979年3月1日にジェノヴァ市内の病院で没した作曲家、指揮者、サクソ奏者。生前はミラノ、ローマと移り住み最終的にジェノヴァの東の町ラパッコに住んだ。1940年ローマで出版されたイタリア音楽家年鑑にはミラノ在住の作曲家、オーケストラ指揮者と記載されているが、現在のイタリア人名辞典 Treccani には名前が無く、活動の詳細が不明である。

作品には組曲「沼地にて」「演奏会用ワルツ」「瞑想」「間奏曲変イ長調」の他、組曲「シチリアの風景」などがある。いずれの作品も耽美的な旋律に溢れたロマンティシズムの極致といえる。またミラノの M.アロモンド社からは Illuminato Culotta Repertorio Orchestrina というシリーズが出版され、非常に多くの作品が出版されている。

本曲は1939年サンレーモの C.Beltramo 社から出版された管弦楽曲で、古き良き時代のナポリの風景を躍動感ある親しみやすいメロディで描写した音楽スケッチである。当時ジェノヴァのマンドリンオーケストラでも演奏されており、録音が遺されている他、マンドリン奏者ニーノ・カタニアによる編曲と録音もあり、当時からプレクトラムのレパートリとなっていたようである。

本曲について石村隆行氏に伺った話によれば、“Quadretti”は本来4枚の風景画という意味で、なるほどそう捉えると印象的なシーンを切り取った絵画からインスピレーションを得た作品という事で理解しやすい。

第2楽章のタイトルとなっているポジリポはナポリの南西に位置する丘陵地帯で、丘から見る夜景が函館山、ビクトリアピーク(香港)と並び世界三大夜景と称されるほど美しい地域。ナポリを一望できる昼間の風景もナポリ湾からヴェスヴィオ火山までが見渡せる絶景地である。ポジリポの丘で最も美しいと言われているのは夕方から日が沈むまでの街の色合いの変化である。それがそのまま第3楽章に繋がってナポリ湾の風景となっている様は音楽スケッチとして出色のものと言える。

第3楽章の最後にか所だけ登場する Vibraphone であるが、開発されたのが1921年、クラシック楽曲に初めて使用されたのが1935年 A.ベルクの歌劇「ルル」と言われている。この楽器が一般的となったのはその後、アメリカのジャズヴィブラフォン奏者、ライオネル・ハンプトンが使い始めてからとされ、この時代のサロンオーケストラ編成の作品に電子楽器である同楽器が使用されているのは相当先進的である。

参考資料

- ・石村隆行 アルバムフィロドリーノ第二巻
- ・ <https://rateyourmusic.com/>
- ・ <https://secondhandsongs.com/>
- ・ <https://www.ilsaxofonoitaliano.it/>
- ・ <http://www.canzoneitaliana.it/>